

2021/05/02

ヨハネの福音書 講解メッセージ④⑧

『否定との戦い』 ヨハネ 15:20-16:4

■肯定と否定の戦い

「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」

(ヨハネ 15:20)

これは、「あなたがたは私の弟子だから、私が迫害を受けるなら、あなたがたも迫害される。」という意味です。「迫害」という言葉を「否定」という言葉に置き換え、「もし彼らがイエス・キリストを否定するなら、あなたがたのことも否定する。」と考えると、わかりやすくなります。

神にとって、善とは神のいのちを肯定すること、悪とは神のいのちを否定することです。永遠性の神のいのちを否定するとは、有限性、つまり、死です。いのちに対して死、永遠性に対して有限性——これが、善と悪です。

この世界は、永遠性と有限性の両方からできています。人間の構造は、神のいのちが貸し出され（魂）、そのいのちを支えるための体があり、神のいのちが神と一つになる運動を展開しますが、その運動の正しさを体は確認しようと、情報を収集します。すると、そこに思惟する「精神」が働き出します。その「精神」が人間です。人間を支える神のいのちは永遠性で、そのいのちを支える体も、人間が神に造られた当初は永遠性でした。しかし、悪魔の仕業によって体が有限性になったため、永遠性である神を確認できなくなってしまいました。人間は神のいのちを持ちながら、神を確認できなくなってしまったのです。

永遠性を知りながら有限性を知り、善を知りながら悪を知り、いのちを持ちながら死を持っている……、私たちは矛盾を抱えた存在で、どちらに属しているのか、不安の中にいます。そして、やみの世界は、この世界では確認できない光を飲み込もうとします。だから、この世界で永遠性を主張すると、有限性から迫害を受けるのです。

「しかし彼らは、わたしの名のゆえに、あなたがたに対してそれらのことをみな行います。それは彼らがわたしを遣わした方を知らないからです。」(ヨハネ 15:21)

有限の世界の特徴は時間と空間です。ですから、私たちは常に、始まりがあって終わりがあるという考え方をし、結果に対しては必ず原因があるという思考パターンを持っています。(これを因果律と言います。)つまり、有限の世界では、「神とは、すべての始まりの原因である」と考えるのが限界です。

神はどこから来たのか、因果律で神を説明することはできません。しかし、神がないことも説明できません。これが理性の限界です。つまり、私たちは信仰でしか神を知りえないのです。

■罪に気づく

「もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。しかし今では、その罪について弁解の余地はありません。」(ヨハネ 15:22)

イエス様が来られる前から罪はありましたが、光を知らなければやみがわからないように、イエス様が来なければ罪はわかりませんでした。イエス様が来られたことによって、自分が罪の中にいると気づくことができるようになったわけです。やみを知ったにもかかわらず、やみにとどまろうとすること、これが不信仰であり罪です。

ここで重要な点は、罪という言葉の理解です。人は、罪という行いを基準にします。しかし、イエス様が教えている罪は、行いではなく状態のことです。的を外れている状態、つまり、光の中にとどまらない状態が罪なのです。

「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。」(ローマ 5:13)

死が入り込んだことで、私たちは罪を犯すようになりました。しかし、律法がなければ、罪だと認められません。つまり、神の律法は、罪に気づかせるためにあるのです。御言葉によって罪に気づいたら、もはや弁解の余地はありません。罪にとどまることをやめましょう。

■自己否定を否定する

「わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいるのです。もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったのなら、彼らには罪がなかったでしょう。しかし今、彼らはわたしをも、わたしの父をも見て、そのうえで憎んだのです。これは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。」(ヨハネ 15:23-25)

これは、「父と私は一つである」という意味です。三位一体の神は、上下関係はなく、それぞれがお互いを必要とする一つの関係です。

イエス様がなされた奇跡の中で、もっとも驚くべきことは、ラザロの復活です。死んだ人が復活するなど、誰も信じることはできませんでした。死人がよみがえるということは、死

という否定を否定すること、すなわち、肯定です。イエス様はこのことを通して、永遠性は現実なのだと思わせたのです。

それを見たにも関わらず否定するのであれば、言い逃れはできません。ところが彼らは理由なしに否定しました。私たちはとにかく否定します。何か言われると文句をつけて否定し、さばきます。それは、私たちが否定する眼鏡しかかけていないからです。

私たちがかけている眼鏡は、有限性の眼鏡であり否定の眼鏡です。人を生かす肯定の眼鏡ではありません。なぜなら、私たちは制限されているからです。制限は否定です。いつかは死んでしまうという制限、能力の制限、想像の世界では何でもできるのに、現実には飛べないし、未来にも過去にも行くことはできません。そのため、自分のことも否定します。また、お互いに能力を比較すればするほど、自分は否定された存在にしか思えません。

自分を否定して見ることの始まりは、アダムとエバです。悪魔に欺かれて罪を犯した結果、死が入り有限性になったため、永遠性が見えなくなりました。永遠性の神が見えず、その愛が確認できなくなって不安になった二人は、自分の姿を意識するようになりました。それが罪の始まりです。二人は自分の姿を見て恥ずかしいと思い、イチジクの葉で腰の覆いを作りました。二人は自分を隠そうとしたのです。

人間の生き方には、自分を否定して見ているという共通項があります。自分を恥ずかしいと思っているので、少しでも自分をよく見せたいと思って、何かで自分を覆い隠そうとしています。アダムとエバが始めた生き方を継承しているのです。人から良く思われるとほっとし、人と比べて自慢できるものがあると安心します。「がんばった自分へのごほうび」などと言うのも、心理学的には、自分はダメなものだということが前提になっています。ほめるということは、実は否定を前提にしているのです。

しかも、私たちが自分を肯定するために手にしているものは、すべてこの世界のものであって、朽ちるものです。やがて消えてなくなるもので肯定したところで、否定で否定を隠したにすぎず、実際には何も肯定されていません。

このような私たちを、神はそのままで美しいと言われます。神様は、「栄華を極めたソロモンさえこの野の花の一つほどにも着飾っていなかった。」と言われました。花は自分を金銀宝石で飾らずとも、そのまま美しい存在です。神の目から見た私たちも同じです。

私たちは一生懸命自分を肯定しようとして生きていますが、「自分はダメだ」ということを前提にしているので、何も肯定していません。私たちは前提を変えなければなりません。神の福音は、この前提を変えるのです。

私たちの真実な姿は神のいのちです。体は神のいのちを確認するためにありますが、有限性になった体では神の命を確認できないため、神は私たちに霊の体を着せてくださいました。その結果、私たちはイエス・キリストを知ることができたのです。

ところが多くのクリスチャンが、本来の姿を取り戻していることに気づかず、以前のように、朽ちるもので装おうとし続けています。私たちは、否定という前提を壊さなければ前に進めません。どんなに着飾ったところで、神が造ったからだのほうがよっぽど美しいのです。

■助け主

「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。あなたがたもあかしするのです。初めからわたしといっしょにいたからです。」(ヨハネ 15:26-27)

私たちはどんなにがんばっても自分の力ではこの否定の眼鏡をどうすることもできません。そこで、イエス様は、助け主を送ると言われました。私たちは、着せられている霊の体(永遠のいのち)によって、神の思いが確認できるので、すでにその助けを受けています。霊の体で確認できるので、イエス・キリストを信じることに、この世の確認はいりません。私たちのすべきことは、ただ聖霊が教えてくれていることを受け取って信じるだけです。ですから、受け取ったものを、証ししていきましょう。

私たちの中に助け主なる御霊がすでに共におられるので、私たちは信じることができるようになり、そして、祈ることができるようになりました。神が助けてくれるから、祈ることができるのです。

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」(ローマ 5:26)

私たちが神に祈る時、実は神が祈らせてくださっているのです。祈りとは、神と一つになろうとする運動です。あなたが不安や寂しさや恐れにおびえる時、神はあなたを祈らせようとします。祈ることで神と思いを一つにしようとする働きを御霊が助けているのです。

私たちには否定する体しかないので、どうすることもできませんが、霊の体を着せられたので、御霊の助けによって、「アバ父」と祈ることができるのです。

■否定するのは肯定を知らないから

「これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまずくことのないためです。人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。彼らがこういうことを行うのは、父をもわたしをも知らないからです。」(ヨハネ 16:1-3)

この世界は悪が支配していますから、神のことばを否定します。イエス様は、私たちがそれを聞いて自分を否定することがないように、この世が神のことばを否定するからくりを前もって教えてくださったのです。

パウロがそうであったように、クリスチャンを迫害する人々は、自分は神の前に正しいこ

とをしていると信じていました。その理由を、イエス様は、「父をもわたしをも知らないから」とおっしゃいました。言い換えると、「肯定を知らない」ということになります。肯定を知らない否定の世界で、人は、相手を否定することで自分の否定を隠そうとし、良い行いを通して自分の否定を隠そうとしています。しかし、肯定があることを知るなら、行いによって義を立てる必要はありません。肯定をただ受け取ればよい、これが信仰です。

■神が明らかにした肯定とは

1. 死人であっても生きられる者になる

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

イエス様はラザロの復活を人々に見せ、永遠があるということの実体を人々に見せました。

2. 罪人であっても無条件で愛されている

ダイヤモンドに泥がついてもその価値は変わりません。しかし、私たちはお互いの表面についた泥を見てさばきあっています。しかし、神様は泥の下はダイヤモンド以上の価値であることを知っていますから、泥のまま引き受けるのです。

姦淫の女性を石打ちにすべきだとする人々に、イエス様は「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」と言われました。すると、誰も石を投げることをしなかったので、イエス様は次のように言われました。

「イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」(ヨハネ 8:10-11)

イエス様は、誰も裁きませんでした。裏切る弟子のことも、自分を殺そうとしている人のこともです。むしろ、「彼らは何をしているのかわからないのだから、赦してください」と祈られました。

私たちの表面は確かに悪いことばかりします。しかし、神様は表面の汚れは気にせず、その下の本当の姿をご存じなので裁かないのです。そのままで私たちを引き受け、その泥をとってくださいます。それが無条件で愛されるということです。神はあなたの本当の姿を知っているのです、罪人であっても無条件で受け入れるのです。

3. 何があっても見捨てない

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」(ヨハネ 10:28-29)

何があっても見捨てられることはない、それが神の肯定です。というよりも、神は見捨てることができないのです。なぜなら、私たちの土台は神のいのちだからです。

それを知らないために、誰もが自分の力で自分を肯定しようとします。人から褒められたり、生きがいを持ったりすることで、安心して満足しようとするのです。しかし、この世のもので評価を受ければ受けるほど、私たちは不安になります。自分の否定を隠しているこの評価が失われたらどうしようかとおびえているのです。それは否定を隠すからです。

神の肯定を知らないがために、自分の力で頑張るわけですが、どんなに頑張っても永遠のいのちだけは獲得できません。だから人間は永遠のいのちに関しては妄想による希望を抱いて、生まれ変わったらこうなるのだとありもしないことを信じるようになってしまいました。けれど、私たちにとってのいのちの保証は、イエス・キリストしかありません。イエス・キリストを信じて永遠のいのちを受け取っていることを知り、神の肯定を受け取ればいいだけです。

私たちは、神が肯定してくれているということを知らないと無駄なエネルギーを使ってしまう。頑張らないと神に褒められないなどということはありません。そのまま神は引き受けてくださっています。だから、神の言葉を信じて、表面についた泥を神に洗っていただければよいのです。

「しかし、わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです。」(ヨハネ 16:4)

イエス様は、ご自分が十字架に架かる時が近づいてきたので、あらかじめこのような話をしました。本当に聖霊によって助けられていることを知る時が来るペンテコステが来ます。その時、彼らはイエス様のことばを思い出すことでしょう。

神の恵みを思い出す、忘れないということが重要なのです。誰も自分の努力によって救われた人はいません。自分の功績は何一つなく、神に助けられ、神に導かれたのです。

祈って問題が解決された経験があれば、それを忘れないことです。神の恵みを思い起こすとき、私たちは自分が神に肯定されているということを知るのです。そうすれば、この世界の否定の波につぶされそうになったとき、神は私を見捨てない、私は神に愛されている、だから神の言葉を信じるという戦いをすることができます。